

はじめに

本テキストは、皆さんが無理なく基本をマスターし、かつ応用力を養成できるように編集してあります。

単元ごとに、知識を定着させるための例題と「解法と学習の手引き」があり、さらに問題を解く力を確実にするために、演習問題Aと演習問題Bが段階を追って配列してあります。

古典は知識の積み重ねが不可欠な教科です。本テキストの学習を通じ、正解へのプロセスを体得し、実力を確かなものとされることを願っています。

構成と活用法

本テキストは、次のように構成されています。

▼例題 各講で基本的な問題を出題しています。

▼解法と学習の手引き 例題の単語や語法についてヒントを示しています。
わからない問題がでたときに役立ててください。

▼演習問題A 基礎力の再確認を目的としています。解けた場合も、そうでない場合も、正解に至るまでの過程を必ず確認しましょう。

▼演習問題B 応用力の養成を目的としています。例題・演習問題Aで学んだ文法・用語をどのように活用していけばよいかを考えながら、問題に向かうと効果的です。

◆ もくじ — 古典Ⅱ

1 日記(1).....	2
2 日記(2).....	8
3 随筆(1).....	14
4 随筆(2).....	20
プラスα 助詞の総まとめ.....	26
付録—文語文法要覧.....	28

問三 [] に入る最も適切なものを、次のア～キの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア ゆ イ る ウ つ エ ね オ れ カ で キ よ

問四 波線部甲・乙の「べき(べし)」を参照し、次の(a)～(c)に入る適切な語を、後のア～カの中から選び、記号で答えよ。

助動詞「べし」は、動詞・助動詞の (a) 形に接続する。しかし、ラ変の語には (b) 形に接続する。「べし」の上の語が形容詞・形容動詞の場合は、その (c) 形に接続する。

- ア 未然 イ 連用 ウ 終止 エ 連体 オ 已然 カ 命令

[a] [b] [c]

問五 Aの「」の部分分は、誰が、誰に言った言葉であるか。問一の選択肢の中からその人物を選び、「誰が誰に」の形で記せ。

解法と学習の手引き

大字の部分の単語や語法の解説をヒントに例題の問題を考えてみよう。

このごろは四月、祭見に出でたれば、かの所にも出でたりけり。① さなめりと見て、むかひに立ちぬ。② 待つ

賀茂祭 時姫 (車で) 副詞+断定+推定 X

ほどのさうざうしければ、橘の実などあるに、葵をかけて、

たねばな あひひ 手持ちぶさたなので

あふひとか聞けどもよそにたちはなの

今日は葵の祭でお会いできる日と聞いておりましたが、あなたはこの橘のようによその所にお立ちになっていますね

といひやる。やや久しうありて、

きみがつらさをけふこそは見

(この黄色い実の「きみ」ではありませんが)あなたの薄情ぶりを、今日という今日は見せてもらいましたよ

とぞある。「憎かるべきものにては年経ぬるを、などけふとのみいひたらむ」といふ人もあり。帰りて、「さあ

甲当然 乙意志 係助サ変(已然)係助 打消 過去 待女 継続

りし」など語れば、「食ひつぶしつへき(こちこそすれ」とやはいはざりし」とて、いとをかしと思ひけり。

過去 A 乙意志 係助サ変(已然)係助 打消 過去 待女 継続 面白がっている

ヒント

問一 主語の判定。まずはこの作品が日記というジャンルであることに注目して筆者の存在を意識する。

問二 「さ」は前述の状態を示す、状態の副詞。指示の副詞ともいわれる。

問三 係り結びに注意。上の「こそ」に注目する。

問四 助動詞の接続の問題。「べし」はウ段音に接続している。

問五 直前の「帰りて、……など語れば」に注目。当時は夫がいつも正室と同居していたわけではないことに注意する。

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。問題の都合上、句読点を省いた箇所がある。

五日。今日からくして和泉のなだより小津のとまりをおふ。^①松ばらめはるるなり。^②これかれ、苦しければ詠める歌、

ゆけどなほ行きやられぬは妹が續む小津の浦なる岸の松ばら

かく言ひつつ来るほどに、ふねとくこげひのよきにもよほせば、かちとり、船子どもにはく、み船よりおほせたふなり朝北のいでこぬ先に綱手はやひけといふ。^④この言葉のうたのやうなるは、かちとりのおのづからの言葉なり。かちとりはうつつたへにわれうたのやうなることいふともあらず。^⑤聞く人のあやしくうためきてもいひつるかなとてかきていざれば、げにみそ文字あまりなりけり。

(注) ○妹が續む〓「麻(〓小津の「小」)に冠する枕詞。また、「續む」が「倦む(〓うんざりする)」との掛詞になっている。○朝北〓朝方に吹く北風。

問一 傍線部①「おふ」の解釈として最も適切なものを、次のア～カの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 終える イ 背後にする ウ 目ざして行く エ 命令して行かせる
オ 引き受ける カ 取り止める

問二 傍線部②「松ばらめはるるなり」の解釈として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 松原を眺めていると晴れ晴れとした気分になる。
イ 松原は目を見張るばかり美しい眺めである。
ウ 松原ははるか彼方に遠ざかってしまった。

出典

「土佐日記」

平安時代、九三五年頃の成立。仮名書きの最初の日記。筆者紀貫之は「古今和歌集」の撰者で、その仮名序の筆者でもある。また三十六歌仙の一人に数えられる歌の名人。土佐守の任期を終えた貫之が帰京するまでの船旅を中心とした五十五日間(十二月～二月)の旅日記。

重要古語

- ◇ からくして〓 やつとのことぞ。
- ◇ とまり〓 港。
- ◇ 行きやられぬ〓 行きつくせない。
- ◇ たぶ〓 尊敬の補助動詞。
- ◇ うつつたへに〓 ことさら。
- ◇ げに〓 なるほど。

工 松原が見渡す限り遠く長く続いている。
才 松原には新芽も芽吹き、季節はすっかり春である。

問三 傍線部③の「ふねとくこげひのよきにともよほせば」を品詞に分解したとき、最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 名詞・形容詞・動詞・名詞・助詞・形容詞・助詞・名詞・動詞・助詞
イ 名詞・動詞・名詞・助詞・形容詞・助詞・名詞・動詞・助詞
ウ 名詞・助詞・名詞・助詞・形容詞・助詞・動詞・助詞
エ 名詞・形容詞・動詞・名詞・助詞・形容詞・助詞・動詞・助詞
オ 名詞・形容詞・動詞・名詞・助詞・形容詞・助詞・名詞・動詞・接続詞

問四 傍線部④の「この言葉」が指す範囲として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 「ゆけどなほ」から「岸の松ばら」まで
イ 「み船より」から「綱手はや」まで
ウ 「み船より」から「はやひけ」まで
エ 「ふねとくこげひのよきにともよほせば」
オ 「朝北の」から「はやひけ」まで

問五 傍線部⑤の主語を示す文節「聞く人の」に対応する述語を示す文節（または連文節）として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア あやしく イ あやしううためきても ウ いひつるかなとて エ かきていだせれば

POINT

- 問一 漢字を当てると「追ふ」。
問二 「はるばるなり」の語義がポイント。
問三 「ふね・とく・こげ・ひ・の・よき・に・と・もよほせ・ば」に分かれる。
問四 「かちとり」の言葉。
問五 ⑤の下の引用の助詞「とて」に注意する。

